

IAU 第 17 回 総 会 報 告

古 在 由 秀*

IAU (国際天文学連合) の第 17 回総会が、8月 14 日から 23 日まで、カナダ・モントリオール市のモントリオール大学を中心としてひらかれた。この総会には世界の 49ヶ国から 2,000 人ほどの人が参加したが、このうち日本からは 50 人ほどが出席した。会期が 10 日ほどであったので、連日、10 近くの会場で 9 時から夕方 6 時まで会議が続き、かなり忙しい日程であった。

最終日の 23 日の総会では、718 人の新会員が認められ、IAU の会員の数はほぼ 4,500 人となり、またインドネシアの加盟が認められた。

また、新会長としては、インドの M. K. V. Bappu が、新副会長としては、南アフリカの M. W. Feast、チェコスロバキアの L. Kresák、英国の R. Wilson がえらばれ、副会長には、米国の S. Heeschen、ソ連の E. K. Kharadze、カナダの S. van den Bergh が留任する。また、総幹事にはアイルランドの P. A. Wayman が、総幹事補佐には R. M. West がえらばれた。

また、16 委員会 (Physical Study of Planets and Satellites) と 17 委員会 (Moon) とが一緒になって、16 委員会となり、5 委員会の名前が Documentation から Documentation and Astronomical Data に、14 委員会の名前が Fundamental Spectroscopic Data から Atomic and Molecular Data に、44 委員会の名前が Astronomical Observations from Outside the Terrestrial Atmosphere から Astronomy from Space に、45 委員会の名前が Spectral Classifications and Multiband Colour Indices から Stellar Classification に変えることが認められた。

なお、日本人で委員会の委員長にえらばれたものは、4 委員会 (Ephemerides) の進士晃、7 委員会 (Celestial Mechanics) の古在由秀、12 委員会 (Radiation and Structure of the Solar Atmosphere) の内田豊、21 委員会 (Light of the Night Sky) の田鍋浩義、31 委員会 (Time) の飯島重孝であり、副委員長は 29 委員会 (Stellar Spectra) の寿岳潤、44 委員会 (Astronomy from Space) の小田稔である。

また、総会で採択された決議は、1) ESA (European Space Agency) の Astrometry Satellite と NASA の Space Telescope を支持するもの、2) 電波天文学に対する割当周波数の保護にかんするもの、3) アフリカの赤道地帯に建設が予定されている Giant Equatorial Radio

Telescope の計画を支持するものであった。

なお、フランスが提案していた、IAU の総会を 4 年に一度にしようという提案は否決された。

今回の総会では、中国の IAU 加盟問題が一步前進した。総会前に Blaauw 氏 (前会長) が精力的に動きまわり、7 月中旬に日本で IAU、中国本土、台湾の 3 者会議をひらいて中国加盟問題に決着をつけようとした。これは成功しなかったが、台湾の他、南京、北京、上海の天文学者が IAU に出席した。なお、中国本土の人達は、まだ IAU に正式に加盟していないということなので、総会はもちろん、各委員会の administrative とかかれた会には出席しなかったが、科学的な会には出席していた。

また、会期中にも 3 者の協議は行なわれており、中国が全体として China として IAU に加盟することには同意ができ、今回も China という名前の下に台湾からと中国本土からの参加者の名前が一緒になってならべられていた。

しかし、実際問題として、1 つの China という名前の下に、2 つの加盟団体を当分の間はおかなければならず (日本での加盟団体は日本学術会議)、総会への代表者も各団体から 1 人づつ、分担金も 2 団体で払うことも同意され、中国本土側の加盟団体の名前は Chinese Astronomical Society (Nanking) (中国天文学会の会長は南京の紫金山天文台の張台長である) とすることも合意された。しかし、台湾側の加盟団体の名前を Chinese Astronomical Union at Taiwan にするか of Taiwan にするかで合意ができず、この問題についてはなお協議が続けられている。この問題さえ解決されれば、上記のような条件で中国を IAU に加盟させることが総会で決議された。このような方法で中国の IAU 加盟が実現すればこれにこしたことではなく、Blaauw 氏をはじめ両者の代表の苦心が実ることになる。

なお、次回の IAU 総会の開催地については、ブルガリアということになっていたが、7 月になってブルガリアがこれをことわったために混乱が生じた。そこで、今回の会期中に結論がえられなかつたが、ギリシアで開催が可能ならば、1982 年にギリシアで、可能でなければ 1983 年にスペインでということになる。なお両者とも都合のつかない時には、アメリカ (ボストン地区) で開かれる。なお、その次には、インドが立候補している。

なお、筆者の出席した委員会での決定事項のうち、次の 2 つの事を記しておく、そのうちの一つは、IAU Cir-

* 東京天文台 Yoshihide Kozai:

culars のことで、IAU Circulars はもともと、新しく発見された太陽系の天体や新星についての情報交換を目的としたものであったが、最近になって X 線天体など、各種の天体の情報についても使われるようになっている。そこで、このような新しい天体の情報交換についてどうするかを、Circular の発行者である、IAU 天文電報中央局と関係者とで協議した結果、次のようなことで解決することになった。すなわち、光学観測でないデータや、光学観測でも、彗星、特異小惑星、衛星、新星、超新星の発見以外のものについては、一件について 25 ドルと一行について 7.5 ドルのけいさい料をとることになり、これはすでに行なわれている。

また、従来から、小惑星の命名権は発見者にあるとされてきたが、あいまいな点もあったので、次のような決

議がされた。すなわち、発見者は、番号がついて登録された小惑星の名前を提案することが許される。そして、この提案は一般的には認められる。そして、MPC(小惑星関係の IAU の Circulars) に、その説明がのって正式な名前となる。小惑星の発見とは、同定のために使われる軌道決定のための、最初の出現時のものであり、2人の発見者のいる時は、報告の先の人をとる。また、登録時に発見者のなくなっている場合には、また、登録されてから 10 年命名されない場合には、同定を行なった者、2番目の出現以降の発見者、軌道決定に重要な貢献をした観測を行なった者、発見者のいた天文台の代表者によって名前が提案される。そして、IAU の第 20 委員会の委員長、副委員長、小惑星中央局長からなる委員会で名前を決める。

IAU シンポジウム No. 87 と IAU 総会に出席して

鈴木 博子*

モントリオールの天気が悪く、予定よりも 4 時間も遅れやっと間に合った最終バスで会場についたのはあと 30 分もすれば 8 月 6 日になる頃である。IAU シンポジウム No. 87 の会場モン・トランプランはモントリオールから約 130 km 北方のローレンシャー山脈の山であり、またそのふもとにできたリゾート地の名前もある。期間は 8 月 6 日(月)から 8 月 11 日(金)まで、カナダの国立科学研究所(NRC)のヘルツベルグ天体物理研究所(HIA)がホストとなって開かれる。メインロッジではもうレセプションも終りの雰囲気、その中で登録の行列に並ぶ。ここでまず一騒動。なんと私は女性とそれまで思われてなくて(宿泊希望の質問状には男女をたずねる欄があり、ちゃんと女性にマルをつけて送っていたのに!),他の日本人の人達(電通大の中川、坂田両氏、東京天文台の福井氏)と同室に割当てられていたのである。宿舎及び会場となったモン・トランプラン・ロッジは 2 つのロッジと数十個のカッテジで出席者約 190 人とその家族が泊れた事を考えると約 300 人の収容能力があり、日本で言えば八王子大学セミナー・ハウスの宿泊設備を良くし、プール、テニス・コート、チャペル、山と湖、きれいな空と空気とおいしいフランス料理をつけ加えた様な所である。満室に近い状況の中で幸い組織委員長のタウンズ氏夫妻のコテッジにバス付小部屋があいており、そこに入る事になったが、おかげでタウンズ氏は 2 日目からモーニング・コールを遠慮された様子、どちらも気を使うはめになった。同室になりそこねた人々以外では東京天文台の森本氏は組織委員なので一室占居、シ

カゴからかけつけた空電研の渡辺氏は御家族同伴なのでカッテジに入られた様子である。たった 6 人の日本の出席者とはさびしい限りで、運営委員会も 1 カ月前に日本人にはもう一度出席をうながすテレックスを打ったと聞く、それがなければ 4 名の所であった。論文で名前だけ知っていた多くの人々がお互いに知り合いであるのを見るにつけ、遠隔地にいるハンディキャップを感じずにはいられない。

月曜から金曜まで、晚餐会のある木曜日を除き 1 日に 2 つづつのセッションが開かれた。午前は 8:30~12:00、もう一つのセッションはその日の天気と参加者の希望を聞いて午後 2:00 からまたは夜 8:30 からという事になつており、結局月、金が午後に、火、木が夜になった。それだけ遊びたい人が多かった事になる。1 つのセッションは 2, 3 の招待講演(レビューではあるが、実際に仕事をしてきた人の話)と一般講演が 5, 6 あり、もちろんそれだけでは全部はとても消化できないので別に会場のとなりにポスター会場(ふだんはたぶんラウンジ・バー)が設けられ、24 時間交代で 4 サイクル、1 回に十数枚のポスター発表があった。セッションにタイトルがついていないので紹介しづらいのだが、大体次の様なテーマに別れていた。

- I 一般的な観測のまとめと進展(特にサブミリ)
- II 星のまわりの分子——観測と理論、分光と星間分子
- III 直線分子の観測(特に TMC-1), イオン-分子反応の実験, LMR 実験等
- IV 分子生成の理論——高密度雲、うすい雲、星のま

* 京大理 Hiroko Suzuki: